

久生十蘭とフランス文学・フランス文化

——『十字街』を中心として——

赤 瀬 雅 子

中野美代子（注1）は、久生十蘭（1902-1957）を論じた出色の論文「刻妻無形—久生十蘭における小説の方法論及びその魅惑—」において、つぎのように述べている。

周知のように久生十蘭は、昭和四年暮から八年半ばまでの約三年半をフランスで過し、パリの物理学校及びパリ市立技芸学校に学んだ。フランス滞在中の久生十蘭が、その飽くことのない研ぎすまされた知的好奇心を以ていかにフランス及びヨーロッパを視つめつづけていたかは、帰国後まもない昭和九年に書かれた「ノンシャラン道中記」と題するコン吉タヌ子ものから、戦後に書かれた「ノンフィクション・ノヴェル」もの、特に昭和二十五年の「妖婦アリス伝」に至るまで、その洗練された知性が生んだ名品の数々に歴然としている。久生十蘭とほぼ同じ時期に渡仏した横光利一が「旅愁」を書き、その登場人物たちの齒の浮くような東西文明論をもって昭和文学史に名をとどめたことを併せ考えるならば、日本人の意識における知性なるものの姿がいかに貧しげに痩せさらばえていたかが判ろうというものである。

久生十蘭は、決して横光利一のように深刻な顔はしなかった。その代り、身につけてきた教養とエスプリは、十分な洗練を経て惜しげなく読者に提

供された。そのぜいたくな知性の所産は、昭和文学史ではついぞ話題にされなかったのである。

わが国の近代文学史の中に、もっと大きな地位を占めるべき文学者として、広津柳浪（1861-1928）、岩野泡鳴（1873-1920）、武林無想庵（1880-1962）、辻潤（1884-1944）、葛西善蔵（1887-1928）、金子光晴（1895-1975）、そして久生十蘭等の存在があろう。これら七人のうち、フランスに学び、その文学・文化の影響を深く受けた文学者は武林無想庵、辻潤、金子光晴、久生十蘭の四名である。（注2）昭和文学史においてのみならず、大正文学史、明治文学史においても、中野美代子のいうところの「ぜいたくな知性の所産」は文学史から抜け落ちてしまっている。フランス文化・文学は、あくまで、わが国の文化の表舞台に影響を与えたものとしてではなく、文化の流れの底流として存在せしめようという明治初期の意識が、そのまま忠実に今日に至るまで続いていることは、驚くべきことである。

ともあれ「昭和文学」も1989年を以て締めくくられ、十余年を経た今、わが国の近代文学史を正すのは、比較文学に携わる研究者に課せられた仕事といえよう。小論においては、大都市パリの文化とパリを背景として生まれた文学が、久生十蘭のふたつの都市小説に与えた影響を考察する。

函館区（現在の市）に明治三十五年に生まれた久生十蘭は、郷里の函館中学校を中退し、大正八年四月、東京の聖学院中学校に編入するが、この年の中に退学している。翌年帰郷し、函館新聞に入社、三年後には関東大震災に関する署名記事を書く。

横井司の労作「人と作品 久生十蘭」（注3）によると、昭和三年、再度上京して岸田国土（1890-1954）に師事し、演劇雑誌『悲劇喜劇』の編集に携わる。詩作・演劇の演出・出演には、函館時代から熱中していた。

ところが『悲劇喜劇』は廃刊の憂き目を見る。挿話としては、昭和四年、『悲劇喜劇』に携わった人々の慰労会の席上、久生十蘭は、一寸フランスに行き参りますとの挨拶をした後、そのままフランスに渡ったという話が遺っ

ている。この種の挿話が醸成される雰囲気としては当時の方がふさわしかろうが、実際には、わが国の主要都市から日毎直行便の出る現代の方があり得る話ではある。当時、日本からフランス郵船や日本郵船等による横浜・神戸からの船旅と、シベリア鉄道を利用しての鉄道を主とする旅とがあったが、十蘭は後者を使う。(注4)

パリでは物理学校・技芸学校で学んだがその一方、シャルル・デュラン(1885-1949)に就いて演劇を学んだ。その詳細は判然とはしない。しかしその深淺はともかくとして、久生十蘭にシャルル・デュランとのつながりが存在するとすれば、十蘭の作品には、それを肯定させるものが多々ある。

デュランは新しいレアリズム演劇を創設した人物である。メトロのAnversからPlace Chales Dullinへと辿る路、rue Dancourtに、アトリエ座(Théâtre de l'Atelier)があった。これは19世紀初頭から続く古い劇場で、土地柄に合った感傷劇、笑劇等が上演されていた。師ジャック・コポー(1879-1949)(注5)から独立したデュランは、この劇場を自分の拠る劇場と定める。そして師に倣って、同所に演劇学校を併設する。デュランの提唱する演劇はレアリズム演劇であった。しかしそれは多分に詩的な性格を持つものである。そして音楽の流れとアンサンブルを重視する。デュランの新レアリズム演劇運動は成功した。その要因には、保守的な劇場とは異なり、フランスの劇作品と外国の劇作品を並べて上演したこと、また古典と新作をも並べて上演したことがある。例えばアリストパネス、シェイクスピア、セルバンテス、モリエールを、その新レアリズム理論の許に上演した。ジャック・コポーが育てた演劇人の一人にルイ・ジュベが、シャルル・デュランの弟子にジャン＝ルイ・バローがいること、またジャック・コポーの演劇学校で岸田国土(1890-1954)が、シャルル・デュランのそれで久生十蘭が学んだことを思うと、その演劇の系譜と理論が、フランスと外国においてどのように根付いたのかも、彷彿とするようである。

1946年『新青年』に発表された『ハムレット』は、久生十蘭の代表作のひとつである。軽井沢と思われる避暑地のホテルに、外国帰りの名門の青年を

伴って時々アペリティフを飲みにやって来る不思議な老人がいる。ある日のこと、ホテルの客の一人は、青年から、この老人の数奇な運命を訊くことができたが、その一部につきのようにある。

まだみなさんのご記憶にありましょうが、左団次の自由劇場以来、われわれの仲間で翻訳劇の試演会を催すことが流行し、近衛秀麿や三島章道や土方与志などの、「芽生座」がまずトップを切りましたが、大正の終りごろになると、フランスのアヴァン・ギャルド運動に刺戟されてまた新しく勢いをもりかえしてきました。

阪井などはその一方の旗頭で、坪内さんの講義をきくために帝大の法科と早稲田の文科をかけもちしたくらいでしたが、大正六年の夏「ハムレット」の新演出で、日本の前運動の最初ののろしをあげようということになり、三カ月の暑中休暇を利用し阪井の別荘に合宿して猛練習をはじめましたが、ハムレットは小松顕正、クローデアス王が阪井、オフィーリヤが後で阪井の細君となった小松の許婚の西洞院琴子、わたしがハムレットの親友ホレーショと、まあ大体こういう配役でした。

作品の展開は、このホレーショ役の眼を通してなされる。主役を務める小松は、ハムレット役にはうってつけの容姿を持つ、学究的な人物である。公演が決まると、彼は先ずエリザベス朝の風俗に関する、建築、工芸、服飾、料理、作法等の文献を読み漁り、それは自家の書庫からデンマーク公使館の文庫にまで及んで、一段落つくに到ったが、すぐにつきの課題の脚本の解釈に取りかかる。

ダイトンやカッセルの注釈本を参考にして、So と かSuch とか That とか、そんな簡単な言葉についてもいちいちアクションをかんがえる。そういうあいだにもウィリアム・アーヴィングをはじめ、ダヴィット・ギャリック、フォーブス・ロバートソン、ジョン・バリモア、セイッシイとあ

らゆる名優のハムレットの舞台写真を集め、扮装とメイキャップの工夫をするというふうにハムレットになりきるために異常な努力をつづけていました。

こんな努力が実り、17世紀初頭の英国の方式を真似た、日本で唯一のアングロ・ロマネスク様式の小松の邸をそのまま使った、幕なしの古風な演出による新劇研究会の「ハムレット」が演じられる運びとなった。そのことは評判となり、演劇評論家や新聞記者までが駆けつけたが、小松は劇の進行中に高所から転落してしまい、研究会も解散する。一命を取り留めた小松は、それ以来精神に異常を来し、自分をハムレットであると思いこんで生活しているようである。

この悲劇のあった日に演じられた「ハムレット」には、劇中劇があった。脚本には無い別種の劇中劇である。舞台に登場している人物のある者が、異常な行動をしていたのであった。ハムレットの決闘を終始玉座から見ているべき阪井の扮した王クロードアスが、一旦玉座を降りて、幕の後ろに入ったのである。

新劇研究会の理論的指導者であり、小松殺しに失敗した阪井、小松のフィアンセであった阪井の妻琴子、二人の間にできた娘鮎子は共謀者である。彼等は精神に異常を来した小松の財産を横領し、その安泰のため、さらに小松を亡き者にしようと謀る。あの「ハムレット」の悲劇が起こったのは、1917年、小松が26歳の時のことであった。実は小松が正気に戻ったのはそれから18年後のことである。小松はそれから、生きるために演技を続ける。それからさらに10年が経ち、敗戦間近の空襲の激しいころ、異様な我利我利亡者の阪井一家は、小松に、防空壕に入ってくれたら土を被せるから、そこで死んでくれと頼む。極度に善人である小松はこれを承知して壕に入るが、間近に直撃弾が落下して阪井一家は滅びる。壕の土が崩れ、小松は再び生きて外に出る。

「ハムレット」は、久生十蘭の演劇論の展開が見られる作品である。それ

は、十蘭独特のペダントリーとも重なってくるのであるが、十蘭が殊に魅か
れているのは演劇の重層構造である。単に劇中劇が上演されるというだけの
ものではない。「ハムレット」は舞台背景等を作る必要もない、英国暮らし
の長かった外交官であった小松の父の建てたアングロ・ロマネスクの邸で、
シェークスピアの時代そのままに、幕もなく演じられる。重層構造は「ハム
レット」の圧巻であるが、小松が精神に異常を来した後、阪井一家と阪井の
息のかかった脇役的人物達が、多年、小松が扮し続けているハムレットを中
心に芝居をし続けながら生活する点である。阪井一家の目的は唯一、財産の
横領である。事件の大詰めが来る少し前、かつてホレーショ役を勤めた人
物は、28年振りに小松の邸を訪ねる。

このときわたしの当惑をどういいあらわしていいかわかりません。わた
しはこのままエリザベス朝の中へ閉じこめられ、二度と再び現代へ戻るこ
とができないのではないか。そういった得体の知れない不安に襲われて思
わず身ぶるいをしました。

ボローニヤスの扮装をした老人は北山で、ブロンドの髪をつけた少女は
要するに捲村だと、わたしはすぐ意識をとりもどしましたが、この東京の
一隅、しかもこんな戦争の最中にエリザベス朝の生活がそのまま寛活に繰
りひろげられていようとはさすがのわたしも想像さえしませんでした。

これはかつてのホレーショ役者の感慨である。阪井からは利用しやすい
好人物と見られているこの人物は、小松邸の一員となり、他の雇い人と同様
に、小松が扮し続けているハムレットに仕え、時に応じて何役かをこなす。
そして次第に事件の真相に到達する。ある日、小松は「なんともいいようの
ない優美なしぐさで」この友に語りかける。

「ホレーショ。おぬしこそはわしが交際ろうた人のなかの真の君子人
じゃ」

「はて、これは」

「ああ、いや、追従とばかり思うまい。わしのこの心が物を選びわくる主となって、人の性を能く見別くるようになってからは、おぬしに無上という印を捺した」

シェークスピアの「ハムレット」では、ホレーショーはハムレットのこの世のただひとりの味方、心の友、無二の親友として登場するのですが、これはわたしにたいするハムレットの心からの信頼と愛情の表現だと感じ、孤独の悲哀の海に漂流しながらわたしに手をさしのべるこの不幸な男を、どんなことがあっても見捨てまいとところに誓いました。

戦時下の防空着として、人の知らないのをいいことに、洒落たアメリカ製のスキー服を着ているような鮎子に、性悪な女と知りながら恋をしていたこのホレーショー役の人物も、生命を賭して阪井一家と闘い、小松を救おうと決意する。鮎子がリキュールのヴァイオレットに仕込んだマンダラゴラの毒に当たって彼が痺れていた時、防空壕の事件が起こったのであった。

平凡な日常的な生活の中でも、時間も空間も遡行してそこで凍り付いてしまったような阪井の支配下にある小松邸にあっても、人間のいるところには、必ず複雑な人間関係の重層構造がある。久生十蘭の作品が色褪せることのない魅力を持つのは、この点に彼の文学の中心があるからであろう。

フランス独自のリアリズム演劇の系譜に属しながらも、そこから枝分かれして、詩情に富んだヌーボー・リアリズムともいうべき新しい波を生み出したのが、ジャック・コポー、シャルル・デュランの演劇理論である。それを学び、そこにまた、久生十蘭自身の理論を付加しようとした意図は、「ハムレット」において鮮明である。

久生十蘭の練り上げた文体に関しては、小論の冒頭に引用した中野美代子等、多くの評家の指摘するところである。加えて、久生十蘭の作品の、リアリテを持つ人間模様が展開する場面からにわかに場面が変わり、まったく別種の世界に読者を移動させ、なおかつ読者を納得させる手法は、戯曲の持つ

特質のひとつである。彼は自身の留学体験を背景に重ねた十編余りの作品のなかで、十分、この演劇的技法を活かしている。

なかでも1951年の1月から半年にわたって『朝日新聞』に掲載された『十字街』は、その集大成というべき長編である。

橋本治の論文「遁走詞章」(注6)には、十蘭の他の作品『プランス事件』や、下山事件とも関連させて、この作品のプロットの核をなす部分が、つぎのように分析されている。

『十字街』は、スタヴィスキー事件に端を発した、第二次大戦前夜のフランス国内の政治状況を書いた小説であるが、なんだってそこに日本人が巻きこまなければならないのか？というのである。ここには四人の日本人が登場し、一人は殺され、一人は狙撃されて重傷を負い、一人は発狂してやがて謀殺されるであろうことを暗示して作品は終わる。なんだってフランス現代史の中で日本人がそうも(日本人作者の手によって)虐待されなければならないのかというと、実はこれには裏がある。四人の内三人までが大逆事件に関わりを持ち、残り一人は、政治家である父親が何者かに謀殺されたという過去を持っている。つまり、大逆事件のデッチ上げに象徴される日本の政治風土の暗黒から逃れてきた人間が、フランスのパリに来て、今度はフランス政治の暗黒によって抹殺されるということだ。スタヴィスキー事件——勿論スタヴィスキーも謀殺される——を描くことによって、フランスの暗黒を描き、そのことによって、遠く日本の暗黒まで描き出すという、そういうとんでもない小説なのだ。

この分析にもみられるように、久生十蘭は、現代にまで続く二十世紀のフランス演劇理論から学んだ重層性を最も多く活用して、『十字街』を構築している。さらに『十字街』に言い難い濃密性と重厚性とをもたらしめているものは何であろうか。それはひとつには登場人物のおかれた状況のみならず、生き方や性癖等、フランス語でいえば *goût*, *penchant* に当たるものが、留

学体験を踏まえて詳細に且つ生き活きと描かれていることである。留学体験のある作家はいるが、この点で、十蘭に及ぶ作家はいない。

1933年の大晦日、フランス人の家に学僕として住み込み、計理士になる勉強をしている佐竹潔と、アメリカからやってきた肖像画家志望の小田孝吉とが、トーキョー通りを歩いている。二人とも日本を出てから十年以上になる。二人は時局について少し話したが、新年を祝う屠蘇代わりのヴァンキュイ（ホットワイン）を共に飲むこともなく別れる。小田は地下鉄のトロカデロ駅で、改札係にフランス人を真似て新年の心付けを渡した後、パリ南東の住居に帰ろうと5番線（注7）に乗る。

つぎのラ・モット・ピケという駅から三人の酔漢が肩を組んで乗り込んできくが、真ん中の一人は初老の紳士風、左右の二人は若い労働者風である。何気なくこの人々をスケッチしていた小田は、真ん中の紳士が泥酔しているのではなく、死んでいることに気づいて愕然とする。小田の降りるサン・ジャック駅で彼等も下車し、陽気さを装いながら、早々と改札口を出てしまい、小田の方がベンチにくずおれる。

小田は気を取り直し、警官に出会ったら話そうと改札口を出る。雪になっていた。折からミサ帰りらしい人々に混じって歩いてきた日本人の若い女性が、顔見知りの小田に、ラ・サンテ監獄の塀に沿って行った先のゴブラン館に近い住まいに帰るので、家の近くまで送ってくれと頼む。

小田の生活も苦しいが、この人も豊かにやっている組ではないらしい。黒ずくめで、見かけはすっきりしているが、その気で見ると、帽子にも、外套にも、どこことなく貧の憔悴が感じられる。

「あなたは、どういう勉強をしているひとなんです」

「言語学……というとえらそうだけど、フランス語の先生の免状をとって、アメリカの田舎の大学で、初等フランス語を教えるぐらいのところが望みな」

そんなことを言いながら、監獄の塀に沿って歩いていると、坂の下から

山高帽をかぶった二人連れの男が上ってきた。

パリはフランスではないとは、屢々人の口にすところである。亡命者、移民、観光客、商社マン、留学生等、様々な状況にある外国人を、フランス政府が可成り寛大に受け入れ、それらの外国人の多くがパリに滞在していることは周知の通りである。このうちの留学生についてであるが、パリ大学等で学ぶ各国留学生の大部分は、専門分野の研究をすることを望まず、フランス語をある程度まで勉強し、語学の免状を取得して帰国することが望みである。また、日本人留学生の中には、日本から一旦アメリカに出て何年かを過ごした後、フランスに来る者の少なくないことも目立つ。小田と幸子との会話には、こうした平均的な留学生の一面が、長期滞在者のみの知る現実を踏まえて描かれている。

小田はラ・サンテ監獄の塀の所で出会った男達を見て、地下鉄の二人連れかとぎょっとしたが、そうではなかった。彼等は保安局の刑事達であり、二人に身分証明書を提示するよう求める。言葉のできる女子留学生高松幸子の方が刑事の相手をし、費用を惜しんで身分証明書を取得していない小田を、自分の子供だといってごまかしてしまう。子供には身分証明書は要らない。疑獄事件の鍵を握る政商スタヴィスキーが逃亡して行方不明のため、捜査網が張られているのであった。

ロシア系フランス人アレクサンドル・スタヴィスキーの贅沢な生活、大臣達との交友、賭博場と新聞社における絶大な権力などについて、幸子が新聞の受け売りの知識を小田に語るうち、何時しかゴブランを乗り越してパリの外れのショアジィの辺りまで来てしまう。二人は高松の付けのきくビストロ（注8）でヴァンキュイを飲んで話す。

高松はモーリスという篤志家のお陰で学校に通っているが、秘書から、来月分の学費はシャモニーの近くにあるモーリスの別荘に取りに行くようにと言われている。もちろん旅費はモーリス持ちで、友人を同伴してもよい由である。期末試験を控えた彼女はパリを離れたくはないが、篤志家の気ま

ぐれにつきあわないと学費を絶たれる心配から、小田を誘って行くことにする。しかし不可解な点が多い。モーリスの秘書は時々彼のことをアレクサンドルと言い間違える。高松にはささやかな思い出があった。空腹を抱えてビュット・ショーモン公園の近くを歩いていたある日のこと、一人の中年の紳士が、黙ってサン・ジョルジュ近くのレストランで夕食を恵んでくれ、そのまま立ち去った。その人がモーリスではないかと思う時もある。

作品に登場する人物達は、その曳きずる謎が二重三重になっていて、ますます作品自体の謎を深めているのは、久生十蘭の文学の特質である。小田の目に映った高松は、決して卑しい人間ではない。だが何故、謎の篤志家の奇怪な提案を唯々諾々と受け入れるのであろうか。もちろん、アレクサンドル・スタヴィスキーは謎の多い人物であるが、高松幸子も謎めいた女性である。平均的な留学生であることは、彼女自身の述べる通りであろう。ただし「黒ずくめで、見かけはすっきりしているが、その気で見ると、帽子にも、外套にも、どこことなく貧の憔悴が感じられる」とあるような服装は、留学生のものではない。概して留学生の服装は、裕福な者も貧しい者も、パリで「すっきりしている」とみられるようなものではない。また彼女はパリ南部の場末のとあるビストロに付けがきく。そこで小田と話しながら、ヴァンキュイをおそらくは皿を重ねて（注9）飲んだのであろう。

これらの描写からうかがわれる高松の生活は、留学生の生活というよりはボエームのそれである。若い芸術家志望者が、貧窮に耐えながら何時か世に出る日を夢見て浸っている、放縦な生活である。またボエームに憧れてそれに共鳴したり近づいたりする人々も多い。

「卑しい人間ではない」彼女が見知らぬ紳士に食事をおごってもらったり、モーリスという謎の人物から学資をもらったりしているのは、ボエームの生活に共鳴する生活をしているからである。高松の方が一方的に見知っていただけで、偶然に出会って一、二度話したきりの小田とシャモニーまで一緒に行こうというのも、こうした成り行き任せの生活から出た発想である。このことがやがて小田をも巻き込んだ悲劇を生む。

『十字街』の女主人公高松幸子のような留学生の悲劇を、十蘭は体験者でなくては描けないパリの詳細な地理や、留学生の心理の襞にまで分け入って描く。主題は、フランスの疑獄事件に巻き込まれた日本人達が、いずれも日本の「大逆事件」の影を背負っており、個人は世界の何処にあっても、政争の犠牲になるというところにある。もし十蘭が主題を留学生にしたならば、遠藤周作（1923-1996）の『留学』（注10）に劣らない、体験を踏まえてそれを超える作品を成したであろう。

主人公小田孝吉も、十蘭が高松だけには託しきれない、パリ在住の若い日本人を描こうとして創造した人物である。小田はやはりパリ南部の場末、コルドリエール街の「民衆の宮殿」と名付けられた救世軍の簡易宿泊所に住んでいる。彼には地方の名士宅を訪問して肖像画を描いていたアメリカ体験がある。この技芸を磨こうとシャンゼリゼの裏通りにある肖像画学校に入って当初は感激していたが、やがて贋物作りの本道を教えるのが主目的の学校ではないかと疑いはじめる。学校では絵の具の亀裂の形、煤のつけ方、石英灯の試験をごまかす技法等を教授してくれるのである。やがてアメリカに戻り、平凡な肖像画家として人の邪魔にもならず生きるのが望みの小田はとまどっている。

明るく1934年の元旦、小田は昼食のできる場所を探し歩くが見つからず、いつしか大戦以来アメリカ臭くなってしまったモンパルナスにさしかかり、有名なキャフェ、ル・ドーム（注11）に入る。

パリの習俗では、十時ぐらいから午後の四時頃まで、キャフェは新聞を読みにくるところになっている。右派も左派もひっくるめ、カトリックの機関紙から産業新聞まで、依怙最良なしに揃えておくのがキャフェのつとめになっているが、政治にも、スポーツにも、パリのうるさい市井雑俎などにいささかの関心もない小田にとって、これはまるっきり用のないものだった。

十蘭はこのようにパリの有名なカフェを説明し、そこにおける小田を描く。小田が給仕への義理にざっと見た新聞の見出しに、スタヴィスキーがマレ氏をどうかしたというようなことが見え、昨夜の地下鉄でみた泥酔者と見せかけた死者の写真も出ている。給仕に訊けば、酔った代議士マレが天文台付近の雪の中で転倒して死亡したとある由である。

遅版の英字併記の新聞には、スタヴィスキーについての解説が載っていた。彼は政界・財界・官界に絶大な繋がりを持っている。先年彼を告発しようとした代議士ガルモが怪死を遂げたのと同様な運命にマレ氏も見舞われたのであろうかという記事であった。

小田は昨日は早々に別れた友人佐竹潔の話を聴こうと、地下鉄に乗る。佐竹の父は「大逆事件」に連座した者とみなされそうになった時、パリの判事フランスに招聘され、匿まわれて生涯を過ごしたが、佐竹もその縁で、父の跡を継いだフランスの子息の家から通学しているのである。小田は悽愴なフランスの法曹界の裏話を聴きながら、マレ氏の死の複雑な背景を思う。地下鉄の番線を間違えた故でゴブラン駅に出た小田は、昨日ビストロで酔って寝込み、結局送って行かず仕舞いになった高松に詫びようと住まいを訪ねてみる。そこは見窄らしいホテルであった。

五分ほどすると、おかみさんが市場へ買出しに行くような黒い大きな買物袋をさげて出てきた。黒ずくめは昨夜のとおりで、今日は、なんともいえない面白い色合いの血紅色のネッカチーフを、あるかなしかというふうに襟もとからのぞかせている。

これもパリの女性独特の風俗である。午後も遅かったが、高松は彼をイタリー広場を抜けてセーヌ河の方に出る、陸橋付近の飯屋に案内する。そこで小田に見せた新聞には大見出しで、スタヴィスキーが南米に逃亡したとあった。これでモーリスがスタヴィスキーではないかという疑念は晴れた。高松に誘われるままに、小田もシャモニー往きを承知する。しかし律儀な小田は

モーリスの別荘には行かず、学生専門の宿を取る。高松一人がカフェで別荘の在処を訊くが、カフェの主人も客もひどく感じが悪い。やっと辿り着いた別荘は、雪かきもしていない空き屋のような感じであった。それでも人の気配があり、モーリスの秘書のアンリが出てくる。他の招待客として紹介されたのは、ジャーナリストという触れ込みのピガグリオという得体の知れない人物であった。ここでは各自勝手に静養する由である。

安静休養のことはユキ子も聞いていた。スポーツや散歩のかわりに、できるだけ少し食べ、寝室を暗くして、じっと寝ているという休養のとりかたが流行になっているらしいが、そんな生活にぶつかるのは、これがはじめての経験だった。

流行の長期休暇の過ごし方で、無為なのはよいが、したくもない別荘生活で寒さに震えながら勉強していた高松は、政局の極秘事項に関する手紙の燃え滓を見つける。急進社会党の「影の内閣」構想なども、遣り取りされているらしい。

そして秘書は理由も云わずに、一同をこの別荘からシャモニーの貸し別荘に移らせる。と云っても、高松はまだ秘書に阻まれて、自分を招待してくれたモーリスに挨拶もしていない。この貸し別荘にあった古新聞の銅板写真で、彼女はスタヴィスキー、モーリス、そして何時かの夕飯を恵んでくれた紳士とが同一人物であることを悟る。

金融業者アレクサンドル・スタヴィスキーは、十年前に政商の仲間入りをして、右にも左にも政治資金を撒き、この四年間で国庫から60億フランを掘みだした由を、野党側の新聞は述べている。

政権の角逐だけで政治をやっているこの国では、これと思う政敵をやっつけるためには、どんな手段でも選ばない。白を黒にする政治の宣伝の技術は、堂に入ったもので、一点、やましいところのない清廉潔白な人物で

も、無恥無残、ギロチンにでもかけるほかないような、完全な悪党に仕立てあげてしまう。いくらかでも常識のあるものは、政治家が口にする正義とか真実とかいうものは、どれほど空虚なものかということをよく知っている。

高松はこう考える。父が「大逆事件」に巻き込まれて刑死した高松の脳裏では、ふたつの事件が重なっている。『十字街』の主要な登場人物は、偶々異郷のフランスという空間で、十字に交錯し合った人物である。同時に彼等は、時間を遡行すれば、彼等の親が何らかの形で「大逆事件」等の政争の犠牲となり（注12）、それが彼等の人生に尾を曳いている。いままたスタヴィスキー事件に彼等のすべてが巻き込まれるのであろうか。

生活の表面は日本とは全く異なるこのフランスで、規模はさらに大きい、政治という個人を抹殺する機構に捉えられた人物の悲劇が進行して行く。

小田が急に連絡を絶ったことを心配した佐竹は、主人夫婦の旅行を幸いに小田をシャンゼリゼの画学校に訪ねると、休んでいるという。大通りのカフェでは皆、新聞に夢中である。そのカフェのテラスから声をかけた人物がある。佐竹の父の友人で欧州で名の通った、闊達な暮らしをしている鹿島与兵衛であった。フランスの先代が日本にいた頃、若い弁護士であった佐竹の父と鹿島は、フランスの法律論を聴きに通った仲である。鹿島の呉れた「大逆事件」の情報によって、佐竹の父はフランスのフランスの許に逃げ、刑死を免れた。時局に関する鹿島の話は大きい、ペルノーを飲みながらの「カフェ政談」という感もある。鹿島と別れてから後、佐竹はこの大疑獄事件に絡んだ内閣打倒を謳うデモに巻き込まれ、逮捕されてしまう。保釈金は鹿島に頼らざるを得なかった。

一方、シャモニーでもスタヴィスキー事件が大詰めを迎え、この街に潜む彼の逮捕も時間の問題であるとみられていた。高松はシャモニーの繁華街で小田に出会う。小田は彼女に忠告する。

「君なんかの考えているような、生やさしい事件じゃないんだ。落着いてると、たいへんなことになるよ」

「落着いているわけじゃないけど、こんなことになってしまったんですもの、しょうがないじゃありませんか。それで、あたしにどうしろというの」

「悪いことはいわないから、逃げたまえ」

この忠告を聴かなかった高松は、スタヴィスキーの逮捕直前の「自殺」に巻き込まれ、逮捕される。駆けつけた小田に、彼女は卒論を大学の教務課に提出してくれと偽り、事件の重要書類を託す。それは、スタヴィスキーが首相、大臣、上下両院議員との金銭授受を書証の形式にして書き遺したものであった。小田はパリに戻る。シャモニーに行く前、救世軍の宿舎で小田が外套を与えたヴェトナム人が殺されたため、誤って小田の死が報じられていた。小田は宿舎には帰らず、パリ19区のマルヌ河岸の安ホテルに入る。大学の言語学科に卒論を提出し、それから佐竹を訪ねようとジャン・ジョレスからメトロに乗る。車内はパリ二十区統一戦線と書いた布を縫いつけた作業着の男達で満員であった。東駅で四番線の南行きに乗り換えると、緋色のベレの愛国青年同盟の一団に出会う。左右両派の小競り合いの中で、小田はサン・ミシェルで降りる筈のところを、シテで降ろされてしまう。

出たところは、セーヌ河にかこまれた、シテという中洲の島。パリの中でも、とりわけ時代の錆のついた古めかしい界限で、苔の生えたような監視庁やパリ裁判所の陰気な建物が、むっつりとおし並んでいる。(中略)

例のモルグ……身元不明の水死人や行倒れの死体を陳列し、一般の展覧に供するという嫌みな施設がこの寺のうしろにある。

シテに出てしまった小田は、他のことは後廻しにして、身代わりとなった不幸なヴェトナム人の死体を探そうと、法医学研究所を訪ね、不親切をもの

ともせず出屍表に書き入れる。だが、コンクリートの寒い部屋の引き出しから出された死体は、高松であった。

警察の推理では、過日の下院前の騒擾の際、警官に追われ、誤って河に落ちて凍死したのであろうとのことであった。身元不明の死体は6ヶ月間モルグに置かれ、その間に引き取り人が無ければ、無縁墓地に入れられる。

外国で孤独な生活をしている人間の誰しもが行着く道。高松だって、それくらいのことは覚悟の前だったろうから、文句はないだろが、見ないうちならともかく、おなじ血につながる日本人として、むざと無縁墓地へはやれない。

「明日中に引取りに来るから、遺骸はそっとしておいてもらおう」

頼まれもしないのに大見得を切った。(中略)

「それにしても高松ってどんな女だったんだろう」

フランス語の先生の免状をとるために、貧乏しながら勉強していたということだけ……両親があるのかどうか、それさえ知らない。パリという大都会の雑踏の中で偶然に触れあった、行きずりの人間でしかない。こんな役を買って出るのも、おかしいものだが、そうせずにすまされないものがあるのは、なぜだろう。

たしかになにかある。それにはちがいないが、なにか、とはなんなのか、よくわからなかった。

日本の「大逆事件」から、フランスの「スタヴィスキー事件」まで、政争の犠牲者となった彼等の親の代から、いままた彼等を呑み込もうとしている濁流にまで、高松と小田は繋がっている。小田の友人の佐竹もそうではあるが、佐竹の父は生命までは奪われていない。高松の父も高松も、政争の文字通りの犠牲者となった。自分も高松と全く同じ運命を辿るであろうこと、そしてそれをどうすることも出来ない自身であることを、小田は意識下で知っている。

ともかく佐竹に相談しようと歩き出すと、下院前からコンコルド広場にかけての、内閣打倒を叫ぶデモは、激しさを増している。「いままで鬱積していた不満と憎悪が、恐怖と激情の形で爆発した」と小田が解釈したのはもっともであった。民衆は二年このかたの政治の腐敗に激昂している。併行して不思議な事件も連続している。例えばスタヴィスキーと政界の癒着を摘発しかけた代議士ガルモは、「睡眠薬の大量服用によって」死に、遺志を継いだ代議士マレーは、「泥酔のあげく転倒して」死んだ。いままたスタヴィスキーが逮捕直前に「自殺」したのである。

デモを避けて何とかルーヴルに近い橋を渡ろうとした時、騒擾に紛れて小田を殺そうという人物と手下どもに出会う。一人の新聞記者が状況を掴み、殺人未遂者を警部と呼び、この前の日本人の女のようにモルグ送りにしようというのかとなじる。この場はこれでしのいだものの、結局はしたたか頭を殴られ、セーヌ河に投げ込まれる。彼は一命は取り留めるが、以後、精神に異常を来す。

一方、佐竹の庇護者である鹿島老までも、デモ隊の渦に巻き込まれたある日、故意の暴力を受けて重傷を負う。マレ代議士殺害の冤罪を、フランス判事の力で晴らした直後のことであった。

フランス判事は、スタヴィスキー事件の真相に迫る、閣僚・ジャーナリズム・官僚・政商等の結託を、議会審査委員会で説明する運びとなった。しかしまたしても、親の病の篤いことを告げる偽りの電話で郷里に呼び戻される途次、謎の轢死をとげてしまう。様々な事件の審理は、見せかけは堂々としたものであるが、必要以上に複雑で、焦点を誤魔化そうとする意図は見え透っている。

復活祭前日の三月三十一日、高松ユキ子の遺骸が申受けになった。佐竹は鹿島の代理で葬儀馬車をつれてモルグへ受取りに行き、パリの東の端にあるパール・ラシェーズの墓地へ運んだ。

ミュッセや、ショパンや、バルザックの墓の並んだ中央墓地の東北に、

無名墓地の広大な墓域がある。

そして復活祭の休み明けには、外国人の一斉検査がはじまる。佐竹はサン・ミシエルの大通りで、小田はヌイイで検問される。そして小田はデモに参加した咎から、警保局付属の外国人収容所に入れられる。ことはそれで終わらなかった。鹿島の尽力で、48時間以内の国外退去を条件に釈放された小田を、ル・アーヴルまで見送ろうと佐竹は迎えに行く。鹿島の託した帰米のための旅費も持っている。しかし小田には目つきの鋭い男がついていた。小田は佐竹に向かって、この男は元日の朝、地下鉄に酔漢と見せかけてマレー代議士の死体を乗せて運んでいた男の一人だという。小田はまた、鹿島のくれた旅費は小遣いにして、フランス政府の費用で帰米するつもりだなどと、呑気に述べている。

小田と男は地下鉄のコンコルド駅に吸い込まれて行くが、これが小田の見納めであることは佐竹には分かっている。小田の殺害が暗示されることによって、マレー代議士の死体運搬にはじまった『十字街』の円環は、ようやく閉ざされる。

『十字街』は、1937年から翌年にかけて『新青年』に発表された『魔都』と並ぶ、久生十蘭の都市小説の傑作であろう。

比較文学的に述べれば、フランシス・カルコ (1886-1958)、ウージェーヌ・シュール (1804-1857)、レティフ・ド・ラ・ブルトンヌ (1734-1806) 等の影響を、今後、できれば実証的に見る必要がある。

フランシス・カルコの作品には、ピガールに巣くうやくざや娼婦の他に、自身の姿を投影させたボエームが多く描かれている。またその回想記やエッセーは、ボエームが主題である。久生十蘭は、『十字街』の登場人物中、主として高松ユキ子と小田孝吉に託してボエームに近い生活をしている留学生を描き上げた。そして、殊にヒロインに託したきめの細かな、嘘のない現実生活の描写は、他の日本人作家に類例を見ない。(注13) カルコに比べて、量的には劣るが、ボエームの一側面の報告書として、出色の作品である。

ウージェーヌ・シュールのフィクション『パリの秘密』は、オスマンのパリの
大改造計画の影響が全く及ぶことの無かったパリの、腹の出た古い建物が櫛
比する小路々々に、悪漢がひしめき、ビストロが並び、七首がきらめくといっ
た、大衆をわくわくさせるものであった。小田孝吉が通う安レストランの、
時にはその上階がホテルになっているようなものの中で、常連が左翼新聞を
振りかざして議論する姿は、シュールの小説の人物が知的進化をとげたものと
も形容できる。『パリの秘密』の舞台は主としてイール・ド・シテに近い、
パリの古い中心地である。小田の彷徨うのはパリ南部か東部の地帯であり、
ときにデモに参加したり、フランスや鹿島等、上位の階層の人々に接触する
ことの必要から、右岸の中心地に赴く。小田はデラシネになりかかった異邦
人でありながら、しかし精神の廉潔さを失なっていない。小田の行くパリの
道はときにはオスマンの改革した大路であり、ときには古い小路であるが、
何処にあっても政治のどす黒い影が小田を阻む。『十字街』に描かれたブル
ヴァール、アヴニュー、リュウからは、現代の『パリの秘密』といった雰
囲気が立ちのぼってくる。

レティフ・ド・ラ・ブルトヌはここに挙げた作家の中で、もっとも格調
があろう。『パリの夜』は1788年に刊行が始まっている。マントーに身を包
んだ夜の観察者は、大革命の前夜から何年かの間、単に悲惨とか凄惨とかと
は形容しがたい、不思議なパリの街々を見るのである。作品に色気を添える
のは、マレ地区に住む物憂げな謎の夫人である。そしてパリに住む人間で、
この政治情勢がどう成り行くかに無関心な者はいまい。

パリを逃れてシャモニーに行こうとどうしようと追いかけてくる、どす黒
く汚れた政治の手、パリの連日のデモ騒ぎ、そういった騒擾の中で、登場人
物達の多くが、政治によって文字通り抹殺されてしまう。

実生活では穏やかに、新しい演劇理論をパリで学んで来た久生十蘭が描い
た、いわば「私のパリ」、あるいは「私のパリ観」ともいうべき作品が『十
字街』であった。そして虚構として「大逆事件」と「スタヴィスキー事件」
を関連させ、日本とフランスとで同じ事を繰り返させたところに、久生十蘭

の人間の営みについての絶望が垣間見られるのである。

注

注1：中野美代子（1933-）作家，中国文学研究者。主著『『西遊記』の秘密』等。

注2：岩野泡鳴の深いシャルル・ボードレー理解等は，また別個に論じられるべき問題である。

注3：講談社刊文庫コレクション久生十蘭『真説 鉄仮面』後記。

注4：前者の船旅については，明治期以降，仮名垣魯文，成島柳北にはじまり，横光利一，遠藤周作へと続く文学作品の中に，それぞれの視点から詳述されている。

注5：ジャック・コポー（1879-1949）。旧いレアリスムを否定し，人々の想像力に訴える演劇を提唱した演劇人。

注6：河出書房新社刊橋本治著『文学者たちよ！』より。

注7：現在，パリの地下鉄は1番線から1999年新設の14番線までである。1933年当時と現在とでは，同じ場所を通っている線でも，番号が異なる。

注8：手軽な居酒屋。カフェと殆ど同じ役割をはたす店が多い。

注9：新たに注文しても前の飲み物の皿のみは引かずに重ねて行く。勘定の際の便宜を図ったもの。

注10：1964年から翌年に掛けて『文学界』および『群像』に載せられた三部作。

注11：芸術家の街モンパルナスにはル・ドーム，ラ・クーポール，ラ・ロートンド等，パリ屈指のカフェが並んでいる。

注12：小田の父は1919年の総選挙に立候補しての選挙運動中，何者かに連れ去られたまま行方不明である。

注13：他に挙げれば，芹沢光治良の1955年に刊行された『巴里夫人』等には，パリ生活の実体の貴重な報告がある。

Hisao Juran and French Culture

Masako AKASE

When taking a general survey of the history of modern Japanese literature, we often find some works which discuss the differences between European and Asian culture. Educated people are especially ardent about comparative studies of French and Japanese culture.

A prominent literary critic, Miyoko Nakano, stated that though Riichi Yokomitsu's *Ryoshu* (Loneliness on a Journey) won a favorable reputation, it was a mediocre work. However, she appraised Hisao Juran's *Jujigai* (Cross Street) as far more outstanding.

Juran Hisao, born in 1902 in Hakodate, Hokkaido, grew up in an affluent family. Juran loved freedom so much that he abandoned schoolwork at the age of 15. When he was 20, he became a journalist and started writing plays. In 1920, he went to Tokyo to study French playwriting theory under Takashi Kashida, whose work shows the ubiquitous influence of his own teacher, Jacques Copor.

In December 1929, Juran arrived in Paris, after a long journey via the Trans-Siberian Railroad, where he spent three years under the tutelage of Charles Duran. (In fact, his penname, *Juran*, was taken from Duran). Specific information about his activities during this period is unknown. In 1933, 33-year-old Juran returned to Japan at last.

In *Jujigai*, his masterpiece, Juran describes metropolitan Paris in detail and links two French and Japanese political scandal: the Stavisky Incident in French and the so-called High Treason Incident in Japan.

The main character, Takayoshi, and the female protagonist, Yukiko, are taunted by the same fate. In the High Treason Incident, the Japanese

government accuses both characters fathers, innocent civilians, of being criminals and tries to put them to death. Twenty years later, while Takayoshi and Yukiko are studying in Paris, they become victims of the Stavisky Incident. They are both killed by the authorities, although neither of them has anything to do with the incident.

Throughout this fictional work, Juran describes the hopelessness of politics in French and Japan, recognized especially by people living in the countries capitals.

Juran's unique, refined writing is reminiscent of the works of Restif de la Bretonne, Eugene Shue, and Francis Carco. In *Jujigai*, Juran successfully draws a clear picture of Paris as an abyss.

Jûran HISAO et la civilisation française

Masako AKASE

Dans l'histoire de la littérature japonaise moderne, il existe quelques romans dont la thématique est la comparaison de la civilisation occidentale avec celle d'orient. La classe intellectuelle surtout, était passionnée par la comparaison entre la civilisation française et la civilisation japonaise.

Une des célèbres critiques, Miyoko Nakano dit à ce sujet: 《Malgré la bonne réputation du fameux ouvrage de Riiti Yokomitsu, "Ryoshû" ("La mélancolie du voyage") on peut dire qu'il s'agit d'un écrit médiocre, même presque insoutenable. Au contraire, "Jyuji Gaï" ("Les routes croisées") par Jûran Hisao est excellent, plein d'intérêts.

Jûran Hisao est né à Hakodaté- Hokkaïdô en 1902. Sa famille était assez riche mais, aimant trop la liberté, il abandonna ses études à l'âge de 15 ans. A 20 ans, devenu journaliste, il essayait d'écrire quelques drames. En 1928, il se rendit à Tokyo pour apprendre la dramaturgie française. Son maître était le fameux dramaturge Kinio Kisida qui avait étudié chez Jacques Copeau. Les drames de Kisida reflètent d'ailleurs beaucoup ces influences de Copeau.

En décembre 1929, Jûran arriva à Paris après un long voyage en train sibérien. Il étudia presque trois ans auprès de Charles Dullin, (d'ailleurs, son nom de plume-Jûran- est une sorte de parodie de Dullin), mais on ne connaît guère les détails de sa vie à cette époque.. En 1933 il retourna au Japon à l'âge de 31 ans. De ce moment-là et jusqu'à sa mort en 1957, il écrivit un grand nombre de romans raffinés et si riches de détails et de connaissances.

Un de ses chef-d'oeuvres s'intitule -Jyuji Gaï-, dans lequel il décrit Paris, cette grande ville. Il essaie dans cet ouvrage, de réunir deux grands scandales liés au gouvernement en France et au Japon. Il s'agit de l'affaire Stavisky, d'une part, et de l'affaire de -Daigyakujiken- (épisode de terrorisme pour soutenir l'empereur, en 1910) d'autre part.

Le héros et le héroïne de ce roman connurent un absurde destin identique. Le gouvernement japonais avait l'intention de massacrer quelques gens innocents soit disant en relation avec -Daigyakujiken-. Leurs pères avaient eux-aussi subi ce même destin et vers 23 ans, le fils et la fille étaient étudiants étrangers en France. L'affaire Stavisky les rattrapait. Le héroïne Yukiko fut tuée par la police et le héros Koukiti également. Ils n'avaient aucune relation avec cette affaire et étaient totalement innocents.

Tout en le faisant passer pour de la fiction, Jûran Hisao décrit toujours son désespoir concernant le gouvernement, qu'il soit français ou japonais. Surtout à la capitale, on pouvait clairement faire connaître ce sentiment.

Son style raffiné et original, son art unique évoquent Restif de la Bretonne, Eugène Sue et Francis Carco. Dans -Jyuji Gaï-, Jûran sculptait le relief de Paris comme un abîme.